

# 日銀の視点

長い梅雨が明けた。青空の下で緑に輝く水田では、成長した稲が風に揺れている。当地の季節ごとの自然の美しさを実感する。この夏、日銀水戸事務所は開設75周年を迎えた。地域の皆さまのご支援に、あらためて深く感謝を申し上げます。今回は、この間の歴史を少し振り返ってみたい。

日銀水戸事務所長 **鈴木 直行**

被害に備え、本部事務の疎開措置が取られていたようだ。当時の詳細は分からないが、東京一極集中の是正が注目される今日、本部機能の分散先として水戸が選ばれた史実に興味を持った。

空襲による交通途絶などに備え、地元の金融機関の協力を得て当地でお札を供給する体制が整い、今日に至る。コロナ禍の下でも、地元の金融機関や警察のご尽力により、お札の円滑な発行と流通が支え

に合わせて具金融広報委員会に衣替えとなり、金融教育に対する支援などを担っている。このところは、人生100年時代対応、キャッシュレス決済、悪徳商法対応などのシニア向け勉強会、お金の役割や大切さに関する児童向け学習会、金融リテラシーに関する

## 75周年、歴史振り返る

戦中から続く業務は、お札の発行と流通。当時の記録を見ると、44年ごろまではリュックサックを背負った銀行員が超満員の列車に乗り、日本橋の日銀本店との間の現金輸送をしていたという。その後、

戦後の経済復興の過程では、貯蓄運動が展開され、50年に茨城県貯蓄推進委員会が発足。77年以降は当事務所が事務局を務める。その後、時代とともに変化する活動実態

学生向け講義などへの講師派遣の希望が寄せられている。県経済の発展とともに取り組んできたのは金融経済に関する調査・統計業務。石油ショックで経済が落ち込んだ74年には、短期経済観測調査(短

観)を開始。今日も、県内の各企業から頂戴するコメントや回答は、感染症の影響をタイムリーに把握し、政策判断につなげる上で、とても重要なものとなっている。

今後も国内外での感染者数の再拡大の影響を含め、感染症の影響を丁寧に確認したい。同時に、コロナとの共生に向けたIT技術の活用や新規需要への対応などの新たな取り組みにも注目したい。

戦禍の下でスタートした当事務所。コロナ禍の下でも、微力ながら地域の力になれるよう取り組んでまいりたい。  
(次回は9月12日掲載)